

## ロシアの高校・大学教育における東洋史

### —その問題点と課題—

クズメンコ・ナターリア (ロシアウラジオストク経済・サービス大学)

---

#### COMMENT

---

下 里 俊 行 (上越教育大学)

地域史教育を重視すべきだという基調には全く賛成である。ヨーロッパ中心主義と政治事件偏重というロシアの教科書記述の問題点は日本と共通する。もっとも日本では東アジアを重視し社会・文化史の記述の充実を求めている文部科学省の指導要領にそって学校現場では新しい教材開発が進んでいる。報告の「市民的愛国主義」は、日本の歴史教育の文脈では注釈が必要だろう。それは戦前の排外主義的軍国主義のイメージと重なり否定的なニュアンスを帯びている。この概念を日本の社会科教育の文脈で読み替えるならば、基本的人権、国民主権、平和主義の理念をもつ日本国憲法を根幹にすえた公民教育の内容がその内実をなすと言える。日本でのヨーロッパ中心主義の克服は、近代以降のアイヌの地の略奪、琉球処分、台湾併合、韓国併合からその後の大陸侵略につながる一連の植民地主義政策への反省と不可分の関係にある。同じ意味でロシア帝国によるシベリア・極東

のいわゆる「開拓史」観を再検討する必要があるだろう。報告での歴史の「客観的記述」という提言に関していえば、自国だけでなく多様な他の地域の視点・解釈を併記する方法も重要である。その方法論的基盤は、バフチンが指摘したドストエフスキイの小説の手法「ポリフォニー」に見いだすことができるかもしれない。主権国家だけでなく国家をもたない多様な文化アイデンティティをもったエスニック集団をふくめ、様々な声が響きあう時空間として地域史を構想する想像力が歴史家・歴史教師に求められている。報告での提言を具体化するためには、相互依存を重視した歴史資料集を編纂・出版・交換し、各自治体教育委員会が発行する郷土学習用副読本に対岸交流史や友好都市の歴史と文化についての記述を盛り込むよう働きかけ、対岸への修学旅行などの機会を増やすことで、共生の理念を体現する新しい世代の形成にむけて一緒に新しい歴史教育を目指したい。